

## 医学史と宛字

伊藤貞男

現在多くの医師たちが使用している『薬価基準』の中にいまもお記載されているエーテルが、Valerius Cordus によって酒精と硫酸とともに蒸溜して創製されたのは、一五四〇年（天文九年、足利義晴）であった。その後、エーテルに麻醉作用のあることを発見したのは一八一八年（文政元年、徳川家斉）Faraday, Orfila, Jackson たちによってである。そのエーテルは文芸作品の中にもしばしば出ている。

たとえば、ベルギーの象徴派詩人モリス・メーテルリンクの作品「温室」の中に、平原に病人の舎営あり、晴れし日に依的兒匂ふ。

という一節がある。訳者は上田敏であるが「依的兒」には「ええてる」と振り仮名が付いている。

「依的兒」はまた、「瀨氣」とも書く。「瀨」は「顛」とも書き「瀨氣」は「秋の清らかな氣」と辞典にはある。「依的兒」にしても「瀨氣」にしても、いずれも宛字である。

宛字は正式には「充字」と書くが、その由来や語源を辿ると実に多種多様であって読者を困惑させることが多い。とくに古い医学書では、その判読に苦しむ。いま仮に左記に掲げたような場合、読者はどれだけ理解できるであろうか。

薬品

石炭酸水<sup>百倍七十倍</sup> 器械消毒用石炭水<sup>二十倍</sup> 昇汞水<sup>千倍一十</sup> 手指消毒用昇汞水<sup>七倍</sup> 硼酸水<sup>五十倍一</sup> 石炭酸阿列布油<sup>三十倍</sup>  
 硼酸軟膏 亜鉛花 亜鉛花軟膏 古加乙涅水<sup>二十倍</sup> 莫兒比涅水<sup>百倍</sup> 沃度仿謨 武蘭埵酒 嗎囉仿謨 嗎囉仿謨精 絆創膏  
 阿列布油(または胡麻油) 樟腦 樟腦依的兒 偪里設林 阿片末 沃度丁幾 彈力古魯胃謨 安母尼亞水 芳香安母尼亞  
 精 依的兒 亞爾箇保兒 過格魯兒鐵丁幾 樟腦精 莫兒比涅散<sup>〇、〇一ヲ一</sup> 華攝林 石鹼

右の例は日露戦争当時、海戦に備えて主要艦艇に配備されたものである。

一般に用いられている宛字は中国の漢音、吳音、唐音、唐宋音、時としてインド語に由来するものが多いが、医学用語に関する限りではポルトガル語、オランダ語が圧倒的である。それはヨーロッパ諸国の盛衰と東西交渉史に比例するが、それは多くの歴史書に譲るとして、日本人がはじめて接触したヨーロッパ人はポルトガル人であった。そして、そのポルトガル語を学ぶために一五四〇年(天文九年、足利義晴)、当時のポルトガル領であったインド南西部のゴアへ渡ったのが鹿兒島出身の人見彌次郎である。

ポルトガル語は、もともとセルチック、フェニキア、ギリシア、ゲルマニア、アラビア語が混入したもので、基本的にはラテン語に近い言語で、今でもわが国で使われているパン、コンペート、フラスコ、ボタン、カップ(合羽)、ジュバン(襦袢)、ラシヤ(羅紗)、シャボン、カルタ(歌活多)、タバコ(煙草)、コップなどはすべてポルトガル語が日本語化したものである。

これらの一部に宛字が用いられる場合もあるが、ほとんどは外来語として定着したため日常語となっている。

わが国ではじめて洋式医療が行われたのは一五五六年(弘治二年、足利義輝)ポルトガル人のルイ・アルメイダによってであるが、その後徳川初期までの約百年間は、いわゆる南蛮医学が唯一の洋式医療であった。

南蛮は室町時代末期から江戸時代初期まで東南アジアの諸地域を指す言葉として用いられていたが江戸時代を通じては

ポルトガルとイスパニア(スペイン)の二カ国を意味するようになった。

しかし慶長十七年(一六一二年)、耶穌教嚴禁の令が出されるとともにポルトガル人とスペイン人の往来は絶たれたが、その間に国運が隆盛となったオランダは東洋におけるポルトガル人の勢力を駆逐していった。オランダが九州の平戸で貿易を許可されたのは慶長十四年(一六〇九年)であるが、わが国との貿易の全権を握ったのは寛永十七年(一六四〇年)のことである。貿易の全権は握ったものの耶穌教および欧文書籍の流布は依然として嚴禁されていたが、医師を伝えることだけは許可されていた。ここに南蛮医方は、異名同身のオランダ医方として復活するに至ったのである。

江戸時代におけるオランダ医方についてはすでに多く著書があり、ここで述べるまでもないが、オランダ語を和訳した著書にはさまざまな宛字が使用されている。

オランダ語はインドーゲルマニア語族のうちのゲルマニア語に属し低ドイツ語の別派であったが、元来がフランク民族とサクソン民族によってもたらされたもので多くの方言に別れていた。それが一六一九年から一六三六年までに訳された『聖書』によってオランダ国語としての統一をみるに至った。今日でも用いられているガラス、ブリキ、カンテラ、ドンタク、ランドセル、メスなどはオランダ語を直輸入したものである。

ところが、オランダ解剖図譜『ターヘル・アナトミア』を基にして『解体新書』を翻訳した安永三年(一七七四年)の頃は、身体各部の名称にどのような字を宛てていたかといえは、

「ソノ固結撮ムベキモノハ苛勢<sup>ヘシエ</sup>驗<sup>ケン</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>絡<sup>ラク</sup>)・世奴<sup>セニ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>神經<sup>シウ</sup>)・火里私<sup>フリス</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>膜<sup>モク</sup>)・綠兼<sup>コウケン</sup>(其<sup>コノ</sup>形<sup>コノ</sup>如<sup>コト</sup>膜<sup>モク</sup>而<sup>ニ</sup>纏<sup>ニ</sup>脈<sup>マク</sup>管<sup>カン</sup>也<sup>ヤ</sup>)・蠻<sup>マン</sup>度<sup>ト</sup>(如<sup>コト</sup>膜<sup>モク</sup>而<sup>ニ</sup>強<sup>ニ</sup>)・個<sup>コ</sup>題<sup>ト</sup>斂<sup>ケン</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>骨<sup>コツ</sup>)・加<sup>カ</sup>蠟<sup>ラク</sup>假<sup>カ</sup>個<sup>コ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>軟<sup>カン</sup>骨<sup>コツ</sup>)・私<sup>シ</sup>比<sup>ヒ</sup>縷<sup>ル</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>筋<sup>キン</sup>)・百<sup>ハイ</sup>私<sup>シ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>筋<sup>キン</sup>根<sup>ケン</sup>)・機<sup>キ</sup>里<sup>リ</sup>爾<sup>ニ</sup>(在<sup>コノ</sup>下<sup>ノ</sup>神<sup>シム</sup>經<sup>キョウ</sup>與<sup>ニ</sup>脉<sup>マク</sup>絡<sup>ラク</sup>相<sup>サウ</sup>交<sup>コウ</sup>之<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>)・私<sup>シ</sup>刺<sup>シ</sup>古<sup>コ</sup>亞<sup>ア</sup>題<sup>ト</sup>爾<sup>ニ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>動<sup>ドウ</sup>脈<sup>マク</sup>)・何<sup>カ</sup>兒<sup>ニ</sup>亞<sup>ア</sup>題<sup>ト</sup>爾<sup>ニ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>血<sup>ケツ</sup>脈<sup>マク</sup>)・哇<sup>ワ</sup>的<sup>テク</sup>兒<sup>ニ</sup>發<sup>ハツ</sup>天<sup>テン</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>水<sup>スイ</sup>道<sup>ドウ</sup>)・苛<sup>カ</sup>都<sup>ト</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>脂<sup>シ</sup>)・墨<sup>メ</sup>耳<sup>ニ</sup>古<sup>コ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>髓<sup>ズイ</sup>)・ニ<sup>ニ</sup>シ<sup>シ</sup>テ、ソノ流<sup>リウ</sup>動<sup>ドウ</sup>撮<sup>サツ</sup>ムベ<sup>ベ</sup>カ<sup>カ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ザ<sup>ザ</sup>ル<sup>ル</sup>モノハ浦<sup>ウ</sup>縷<sup>ル</sup>度<sup>ト</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>血<sup>ケツ</sup>)・哇<sup>ワ</sup>的<sup>テク</sup>爾<sup>ニ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>水<sup>スイ</sup>)・洵<sup>ウニ</sup>乙<sup>ニ</sup>(其<sup>コノ</sup>味<sup>ミ</sup>鹹<sup>ケン</sup>)・私<sup>シ</sup>物<sup>ブツ</sup>越<sup>エツ</sup>度<sup>ト</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>汗<sup>アヅ</sup>)・毘<sup>ヒ</sup>私<sup>シ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>尿<sup>ニョウ</sup>)・奇<sup>キ</sup>縷<sup>ル</sup>(其<sup>コノ</sup>狀<sup>コト</sup>如<sup>コト</sup>乳<sup>ニョウ</sup>汁<sup>シツ</sup>)・黙<sup>マク</sup>縷<sup>ル</sup>計<sup>ケイ</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>乳<sup>ニョウ</sup>汁<sup>シツ</sup>)・沙<sup>サ</sup>亞<sup>ア</sup>度<sup>ト</sup>(此<sup>コノ</sup>醜<sup>シウ</sup>水<sup>スイ</sup>)

精)・世奴和孤都(此翻ニ神經汁)・太羅念(此翻ニ涙)・窩窩爾私墨爾(此翻ニ叮嚀)・私那都(此翻ニ涕洟)・私百故  
世兒(此翻ニ唾)・亜兒福禮私古沙步(即大機里爾汁)・牙兒(此翻ニ膽汁)・眇及ビ子宮等ノ津液數種ナリ。機里爾(淋  
巴腺)ノ所在ヲ審ニシ、神經ノ視聽言動ヲ主ドルコトヲ始メテ明カニスルコトヲ得タリ。」

とある。  
(富士川游『日本醫學史』日新書院、四一〇頁)

『解体新書』は前野良澤を主として、杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周、嶺春泰、石川支常、桐山正哲たちにより成されたが、オランダ語を解することができたのは前野良澤一人で、その良澤もわずか六〇〇から七〇〇位のオランダ語を暗記していたにすぎなかった、と伝えられている。したがって『ターヘル・アナトミア』の翻訳に際しては「恰モ異邦ニ漂泊シテ東西ヲ辨ゼズ、暗夜ヲ獨行スルガ如クナリキ」というから、その苦勞のほどが偲ばれる。

しかし、その翻訳における「苛」「驗」「奴」「火」「私」「題」「百」「爾」「兒」「哇」「墨」「耳」などの宛字は何を原典としたものであろうか。

このほかしばしば使われている「刺」「何」「乙」「物」「斯」「窩」「德」「歌」「貌」「聖」「莫」(ナ、メ、モとも読まれる)、「篤」(ト、またはゲとも読まれる)に至っては出典の辞書を探すのにも苦勞する。

医学史を繙く時、前記の『解体新書』における訳字のみならず、その訳字に宛字が引用され読者をして判読を困難にさせることが多い。それは国名、地名、学名、人名、病名、症状名、薬品名、器具名など多方面に及ぶ。

以下に、その代表的な例を、二、三列記してみる。

まず国名としては、「業平」「東浦塞」「錫蘭」「莫三鼻給」「工鄂」「突尼斯」「雪際亞」(瑞典)「諾威」「嘩馬」(丁抹)  
「加拿佗」(加拿太)「字露」(秘露)などが難解な例である。

地名としては、「津泥」「華盛頓」「瓜姆」「報達」「角市」「閔行」「漢堡」「温古華」「土篤恒」「鄂木斯克」「倍諾愛勒」

などがある。

学名としては、「人身窮理学」「萬物究理学」「本草学」「抓篤祿及亜」「舍密」「英埵密」「把篤魯文」「越必埵密」などあるが、同じ学名でも宛字の異なるものがある。

病名としては、「虎列刺」は「古里利」「可列羅」「霍亂」とも書き一様ではない。「赤痢」も同様で「冷利」「白痢」「熱利」「甘利」「疊利」などと書かれ、「實布埵里亜」も、「馬喉痺」「馬脾風」などと書かれ、時として判読に苦しむ。今日でも一般に使われている「汗疹」は「汗疔」「汗瘡」とも書くが「沸爛瘡」と書かれている場合にはまったく読めない。

「肝崩」に至っては「沸兒吉須斯八窪屈私」と書かれているが、これなどはよほど医学史に通じた人でなければ解釈できないのではなからうか。

人名の判読もまた困難な場合が多く、「斯篤魯謎兒」「合信」「斐仙」「豫伴尼春・泥・馱累低流」(王函涅斯・埵・我爾徳兒とも書く)「削墨兒」「百兒悉列」「設劉私」「林娜斯」「福鳥的」「遠爾涅滿」「勃郎加盧都」「協乙斯的兒」などあまりにも限りが無い。

薬品、器具類についても、「苔麻林度」「葛上亭長」「丁幾丟爾」「越栗失兒」「舍利別」「噶囉仿護」「鹿角菜」(またはフイリ)「規尼涅」「裏帛」「綿撒絲」「私奔私」的里没迷的兒(体温計)「葛底帝兒」「藥箇」など判読しやさいものもあるが中には難しいものもある。

臓器、髄液の一部については前述したが、「私物越都」(汗)、「毘私」(尿)、「大羅念」(涙)、「私百故世兒」(唾)「窩窩爾私墨爾」(疔瘡)などは振り仮名と意味の註釈がない限りでは理解し難い。

少し古い言葉だが、かつて、わが国に「軍陣医学」というものが存在していた頃の、とくに海軍医務衛生史と日本医学史との関連を調査しているうちに外来医語に対する宛字の判読に苦労した。

日本医学学会に保存されている医学用語に関する文献は昭和六十二年の時点において二一冊を数えている。その中で

「ことばの由来」に関するものが六篇ある。それら全部を収集読了していないので宛字に関する限りのラテン語、ポルトガル語、オランダ語、中国語の必要性を痛感した。

最後に逸話の一つ。明治時代の海軍を背負っていた男が山本権兵衛ならば大正時代を背負っていたのは加藤友三郎である。加藤友三郎海軍大將が海軍大臣を務めたのは大正四年八月から同十二年五月までの七年六ヵ月にわたり、後に総理大臣も兼務した。加藤大將は謹厳寡黙で常に笑ったこともない人として有名であった。大正八年当時、海軍軍医科士官の任官式には海軍省において海軍大臣が訓示のあと序列順に大臣自らが姓名を呼び伝達するのが慣例であった。ところが田中氏の名前を読みあげるところへきて、ハタとつまってしまった。傍らにいた副官や本多医務局長などは、何か失策があったかとハラハラしている時、大臣は、「田中軍医、これは何と読むか？」と尋ねた。田中氏は平然として、「ハイ、田中案山子<sup>カシ</sup>であります」と答えた。大臣は、「フムウ……」と唸ったあと、長い歯をだして、いっぺんに吹き出してしまった。いつも冷厳な大臣が大笑いしたという珍事であった。田中氏の場合は実名であって「案山子」は宛字ではないが、一般には「かかし」（または、かがし）と読まれる宛字である。

さて、博学なる諸賢は、蛸谷、鳩尾、雀斑、さらに、勺旁、愛迪生、卓別麟などを何と読まれるであろうか。とにかく、宛字ほど六箇<sup>ムツカシ</sup>敷いものはない。

(注) 田中氏については『日本医事新報』第二〇四九号、荻野朝一氏の一文をお借りした。

(千葉県八日市場市)